

## 東遊雑記 中

（弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター所蔵成田彦栄氏旧蔵図書）

白石睦弥

古川古松軒は、天明八年（一七八八）幕府巡見使に随従し、東北地方から北海道を旅しており、その記録として書かれた紀行文が『東遊雑記』である。備中国岡田藩の武士であった古松軒は、本文にも記されるとおり幼い頃から地理を好み、その足跡は全国に及ぶ。各地の紀行文が残されており、同書のほかに上方を旅した際の『西遊雑記』などがある。

同書に記録される巡見使一行の人数は、最上郡谷地町大町組の念仏講帳に記録されているといい、巡見三使の供廻りに限れば上一〇七名である。本文中で辺鄙と記されるような僻地を大人数で移動したため時間もかかり、饗応する各藩もその対応に追われた。諸藩に残される巡見使問答等の関係資料は、一問一答で詳細に記され、各藩がいかにこの対応に心を砕いていたかがよくわかる。しかし、接待される側の巡見使も、消費都市江戸に慣れた人々で編成されており、彼らにとって、この旅は決して楽なものではなかった。旅慣れた古松軒も巡見使に同行したため、日程や行き先を制限されることとなった。

『東遊雑記』の特徴は全国を歩いた古松軒ならではの視点で、巡見使に随行し、東国の様子を記録していることにある。巡見使に対する各地

の民衆の反応もよく記されている。現地の方が強く意思疎通ができない様子なども記され、西国の民衆の性格を基準としているため差別的な表現も多く見られるものの、時に風景や諸道具などを図で示し、生彩に満ちた各地の風景・習俗・人々の様子などを知ることができる。

なお、同書には写本が多く存在する。前回から次号まで、三回にわたって紹介する本史料は、同書の部分的な写本と考えられ、細かい差異や記述の前後は見られるものの着色の美しい図も写され、筋の良いものといえよう。

### 参考文献

日本庶民生活史料集成 第三卷（三一書房 一九六九年）

### 【凡例】

東遊雑記 上（前号）に同じ。

【翻刻文】

〔東遊雜記 中〕  
（実証題）

④ 「

④ 所は數百丈もある切岸にて、頭の上に大石きほひかゝりて、（44）氣も魂も身にそ□□心地して、日本のうちとは更におもわれず、異国に「

「おもひありて皆々胆を冷しぬ、三瀬村といふ所より南一里に北波渡村といふあり、此所にも石壁あり、釜谷村にある石壁よりも大ひなり、土人切通しといふなり、段々と坂をこえ□大山村に着す、此所者中々よりき所にして千余軒の町也、大国なる故に十里・二十里にて風俗のかはりやう大ひ也、此辺者田畑も大にひらけ、人物もよ□見ゆるなり、宮館と云要害よく見ゆる古城□あり、天正の頃六藤義氏と云し人の居城□、最上義光の為に落城して家絶ぬるといふ、名所の渡綱の橋は大山村の東南にあると土人の物語り、奥州伊達記といふ書には、十綱の橋と記して、信夫郡の内にありとあらわしてあり、

初にいふごとく、伊達□は詩・文章を第一「作者の自讃より顕ハせし」「所・旧跡の事者信しかたき事多しと水戸の□臣赤水先生かねて物語り、みちのく□十綱のはしとよめる古哥によりて、奥州信夫□（郡）」「せし成へし、実跡□さだかならず、□地の云伝へは、古しへ綱を川の両岸に繋ぐ、其綱を十筋いろくくと組んで渡しけるによりて、十綱のはしとも云しと土人の物語りなり、

新後拾遺

なからへて渡綱のはしにくるつなのくるしき瀬をも猶やわたらん  
新後古今

おのつからくるとみしまに陸奥の十綱のはしの中者たへにき

大山村北一里に龍沢山善宝寺といへる龍女建立の寺と称する古跡あり、色々の怪説有、信しかたくて略しぬ、大山村より北五丁に梶尾明神と称するあり、是は当国九州なる大物忌の神社なり、

廿八日大山村出立、五里四丁にして酒田の浦止宿、

羽州飽海郡酒田左に図する「宮浦の川口より見たる図なり、

此所、羽州第一の津湊、市中三千余軒、商家にて人物・言語大概にて、諸品貧しからず、九州・中国及び大坂より廻船交易の為に往来して此津に泊して国中の産物をつむ事也、大船者宮の浦の川口によせ、酒田までハやうく三百積の舟ならてハ入らず、酒田より川口まで三十五町あり、

鶴か岡直道僅に七里、

最上川ハ世に早川の大河と沙汰する事な「挿図①」も、みなもとと遠からず、清水・清川及び此所までの流を見て、諸州の大河にくらへて予か老を記す、第一山城の国淀川、第二武州刀根川、第三土州四万十川、第四富士川・天龍川・最上川、第五石州よしの川・九州筑後川・阿波の相川なるへし、いまた予か見える所の川に越後の信濃川・当国御物川・奥州の北上川・阿武隈川なり、奥州の川者やかて見る事なれハ後巻にしろへし、予地理の道を好むこと久し、しかれともいまた委しからず、見る人信すへからず、扱是よりしてハ東方者、白砂山連々として□砂の地広大にて、見もしらぬ北狄の地もかくまてにはよもあらしと思

ふ程の事なり、休ミ泊りにも大木の侘しく石となりし数多あり、寒国ゆへなるへし、図左通、二ツなから長さ八尺余重さ十貫目はかり、

廿九日酒田発足、三里にして青塚、三里にして吹浦止宿、此辺の人物にて酒田よりも劣り、鶴か岡近郷とくらへ見れば同国の風俗とはさらに思へぬほとなり、鳥海山者世にしろ大山、酒田より見れハ卯辰に見、

青塚よりは丑寅に〔挿図②〕見へ山の風俗異なり、酒田より麓にて三里、夫より頂まで九里下向道五里、土人の云陰しき道・寛なる道幾筋もありて行程一色ならず、山上に鳥海権現の社あり二間二三間、外ニ柴堂ニヶ所参詣の人の休所とす、別当龍顕寺といふ、山伏三十家山の谷々をひらいて田畑として各作り取にして食地としたり、此山は峯いくつともなく折重りて山中に小なる湖多し、鳥海の湖・鶴巻の湖者大ひ也、遠見する処、風景和国の山とは見へず、数十里の外より〔挿図③〕見ても其雅なる事ははにかたなし、予か思ふ所当山者富士山につく名山なるへし、諸州高山多しといへともかゝる山者すくなし、度々参詣せしものに尋ね聞て山上の事を記せり、むかし酒田浦に算者ありて、山の高サを積り鳥海山高サ十七町五十八間五尺一寸式分目、山高サ十四丁五十六間余、是ハ御案内の者より御巡見使へ申上る所也、一寸二分までをしる事及びひかたし、予コンハツを以て計るに是も齟齬せり、いまたコンハツの道に委しからず此故に実に記さず、此節者晴天つゞき日々鳥海山□見るに峯ハ雪を包雲のもよふによりて其詠め筆に及ひかたし、

鳥海は大山にして鋪地駿州富士山よりも大ひなり、此山四季ともに雪あり、  
海浜より麓まで二里・三里所によりて一定せず、麓より頂まで曲道九

里峯に鳥海権現の小社あり夏月登山す、一ト向道ハ五里なり、此山の事跡はかりなし、山の風俗雅景筆におよはす、

酒田浦と云所より吹浦へ六里、吹浦より女鹿へ二里余、此間ハ東は鳥海山西者大海にて数里の間砂漁の地にして日本の風俗更になし、西川とも御巡見使御通行にて舟あり、鳥海山をとり廻して村郷あり、

吹浦式百軒計の湊にて五六拾石のみの海舟ならては入津ならず、此所に大物忌の神社あり、別当を神宮寺といふ、下山伏三十坊社人三十□巫女一人三十石の除地あり、是を配分して食地とす、諸堂大概にて古跡所也、すへて此海浜ハしやうく<sup>（ツ）</sup>とせし砂原にして草「」になし、

蛋の磯家かくれて爰かしこに見へ荒浪立あかり見る目も恐しく、夕くれ頃一ツ家に煙立□見て何となくものかなしく思ひ侍りてよみ侍りける、

もしほたく蛋の磯家のゆふけふりそれも哀れのかすにたちそふ

案内のものゝ云、鳥海山権現の祭神しる人なく上古山を祭りし名也、山中大ひなる岩有て、かたはらに小社ありて鳥海弥三郎の霊を祭るといへり此事跡未詳、山の麓に弥三郎石と称し弥三郎この石に腰をかけし石なりと云伝ふ、予按るに鳥海の三郎と称せしは阿倍の宗任か事也、鳥海弥三郎と云しは別人なり、弥の字の有となきとなり、後人あやまつて一人と思ふか故にまきはしく古書にも取ちかへあること多し、

松前候<sup>（ツ）</sup>の奥方京家より入らせ給ひ、北陸道を下り給ひし頃、御乗物をよせられしはし御休有し、四方の景色を見給ひつ「」先にも国もあるやとのたまひて声を上□歎き給ひしを、我々も聞し事也と、人足に出しものゝ物語なり、さもあらんと人々に評判せし事也、此日は御巡見使の御馳走にて、漁人大勢あつまりて網を引て、鯛をとり御覧に入しに、

婦人も加はりて綱引体さらに倭国の人とも見へず、賤しきありさまなり、

七月朔日吹浦出立、三里にして小砂川、汐越止宿、有耶無耶ウヤムヤの関の旧跡ハ世に名高き所にて実説詳ならず、女鹿村より二十町の間ハ陰しき道左右岩石図になりかたし、岩石つらなり、右の方に籠山と称して、丸き岩数百万重りて、石と石との間籠の目のことく、踏所穴ありて、其穴へ杖などを差入て見るに深さ限りなし、此故に籠山といふ、左の方よりも岩石そひへ掛りて、身を締め横に成、或ハかゝみ或ハ岩に取付越る所も有て難所計也、海上には奇なる岩数限りもなく、其形雅ならずといふ事なく、灯籠のこときあり、凹にして手水鉢などにせは、価百金もすへきも有、十五丁登りて一間（間）四方の堂あり、慈覚大師自作の像を安置して傍に庵をむすひ庵主住せり、此所者樹木も茂りて休所有て、飽海郡由理郡（由理）の界なり「御巡見使御三所とも歩行にて、駕籠は左の図のことく、荷は人足おのく背に負て、やうくに通せり、有耶無耶の実跡者、小砂川より二里南の関村といふ所也ともいふ所なりともいふ、奥州・羽州へこゆる笹谷峠、関根村といふ、何れにもせよ、此所者世にめつらしき山越なり、

#### 【插图④】

俊頼の家の集に

宿せ山なとうやむやの関越しもへたつる人に音をやなくらむ

此歌によりて、宿せ山と称する山者此辺になきかと、案内のものに尋しに知らず、和漢三才図会に恋の山袖の浦者酒田に近しとある故に、度々土人に尋問しにさらにしる人なし、頭中の哥に、羽州なる恋の山をよめるとありて、

恋の山しけき小笹のつゆわけて【插图⑤】いり初るよりぬるゝ袖かな

恋の山者羽州に入りしより、かしこ爰にて尋しに此山なし、何国にや、年ふりぬれは名所旧跡の地も失ふ事にてかへすくもかなしき事也、汐越といふ処者六郷佐渡守侯の御領分にて、世人善くしる象潟の勝景者此地なり、市中五百軒、商家・漁家交りて大概の町なり、船入自由ならずして大船は五、六艘ならては入らず、小船者橋の下までも入る事也、左に図すといへとも、大ひなるを縮る故に爰かしこを略せり、寺中に此所を図して板となして、参詣の人に売る所あり、いかゝの事にや、其図大ひに違ひあり、予図するも全きにはあらず、見る人察すへし、

世の中者かくても経けりきさかたのあまの苦やをわかやとにして

右 能因法師

きさかたの桜者浪にうつもれて花のうへこく海士のつりふね

右 西行法師

#### 【插图⑥】

此哥大に巧ありて、西行の哥の風にあらず、不審、

西行法師

松しまやおしまの月もいかならんたゝきさかたの秋のゆふくれ

鳴立沢の哥にくらふれは大ひにおとりておもしろからず、

きさかたのおもひしほとにいそかれて残るなみたに袖者ぬれけり

右 再行寺

松しまやをしま塩かま見つゝきてこゝにあはれをきさかたの浦

右の哥はこの所の板にありしを写しぬ、扱象潟の事者世に名高き八十  
八潟・九十九島一眼に見へわたりて、風景松しまにつゝきて無双の勝景



と称譽する所故、予年久しく一見の大望なりしに幸を得て、此日爰に來りて委しく一覽せしに、百聞一見にしかすとて兼て思ひしとは大に違ひて、名高きほと勝地にあらざるか故に、一度ハ力を落し、一度ハ世人の愚眼を歎けり、古しへハしらす、今は一眼に見渡す事ハ、他山に登りて一見せはいかならんや、蛸満寺の境内よりは八十島者一眼に見ゆる所なし、北の方には民家の墓所にて見苦しく、東南の方には藁くろなといへるものを並へ、干潟者無名の草茂り、枯木・われ竹など打ちりてきれいな所ハ稀也、汐入僅なる口より差こみ、蛸満寺をくるくゝと取廻して、島々の風景も広く悪敷所にはあらされとも、名にしおふ松島とならふへしとはおもハす、九州薩摩の坊の津・桜島などにくらへ思ふに、桜島・坊の津勝れたり、此地はいかゝの事にて名の高き事にや不審なる事なり、薩州へは能因・西行をはしめ、近き芭蕉・宗祇などもゆかさりと見へ、他にて世人のしらぬ勝景ゆへに、稱譽せざるなるへし、蛸満寺の山号を后宮山と云、縁記に色々の説あり、予信せざる事故に略せり、和哥の数百首見へたり、定て此風景古しへとはかはりしものなるへし、

きさかたや今は見るめのかひもなし昔なからの姿ならねは  
汐越の町者海士人数多にて、いとなみしけきを見てよめる、

いとまなみ汐越浦のあま人者かはく袂をぬるゝといふらん

二日汐越出立、三里にして白沢、三里にして本所止宿、此間の道々左のかたは海にて、砂地の浜を通行せり、道々の百姓家見苦しからず、本庄は六郷佐渡守侯の御在所にて二万石余、市中の人物もよく、言語も是迄とちがいて、中国の言語に似てよし、江戸を出しより此辺第一は鶴か岡、第二は此本庄なり、万事に心を配り見るに上国の風土あり、予考

見るに何方にても、民富饒の地ハ人物は云に及ハす言語に至るまでもよし、俗にいふ貧は諸道のさまたけにて、貧なる地ハ万事賤しき氣象もあしく思ハれ侍る也、本庄の城者古しへ劍先の城と称して、楯岡豊前守といひし人の居城とせしを、最上義光攻落せしと云う、其後本多上野介正純在城ありし時もありと、案内のものゝ物かたりなり、城者往来より見へす、武鑑に諸大名の国在所を記し、先主の事をも書加へしあり、予度々心見しに其違ひ多し、信すへからず、此辺の町端には、穢多町・百姓家も軒を並て住居す、国風とは云ながら他国にしらぬ事也、本庄などの穢多町中々きれいの家作にて、店にハ皮細工色々かさりてある、貧なる体に見へす、

三日本庄出立、三里にして松崎、新沢宿止宿、本所の町口に船渡し川のあり、本所川とも小吉川ともいひ、川上にては芋洗ひ川と称す海あり、汐さし入て、二、三百石積の海船入るゝ也、此川をわたりては砂道のミにて、此節は暑氣強、砂地焼るかことく、皆々屈せし程の事なり、沖より大浪をよせて打あけ、凡十間余も陸に上る、小石を浪につれて打あけ、引波には海に入風情面白く見へて興あり、馬を引て浪打きは行に荒浪馬の腹をひたす、然とも浪になれし事故、馬卒・馬ともに驚く体さらになし、

松ヶ崎ハ大野とも云ひ、是までは浜道にて久保田への海道あり、此地よりハ御巡見道に懸りて山分に入る、亀田の町は直通りなり、亀田ハ岩城左京亮侯の二万石の御在所也、此所もなくよき町にて、人物・言語あしからず、予按るに御領主の善悪によりて下々の風俗大にちかふ事にて、下々の風俗大にちかう事にて、是までの道中筋御領主政事正敷て、

御身上の能領分は風土あしき所にも何となしに百姓の風俗もよし、御領主政事正しからず御身上もあしき領分ハ百姓の体あしく、下民上をあなとり役人をそしめる事なり、能々思ふに恥敷事の甚敷事なり、扱岩城候も往古よりの諸候にて、海内に於ては御当家ほと古き大名なし、代々奥州岩城の城主たりしか、長尾景勝、神君に逆意ありし時に、岩城家、景勝に組せしに依て、僅に二万石を給はりて、慶長六年、岩城より此亀田へ所替有し事なり、岩城貞隆子なくして、佐竹常陸介義重の子三男但馬守宣隆、岩城を継しより、武鑑などに佐竹家の系図の次に岩城氏を記し有家の紋〔挿図⑦〕如斯の物を付給ふに、此紋何といふ事を世人しらす、予此度岩城侯より御馳走役人出されし赤沢市右衛門云し人へ右の御紋は何と称し何を略したる紋哉と尋しに、岩城家古しへより日の丸に昇り龍下り龍を家の印にいたし候故、夫を略して定紋に付申事にて、日の丸の紋と称し候と答有し也、予初て聞ぬ、左もあるへきにや、亀田にて武家町通り、左右より家中の人見物に出しを見るに、花ハみよしの、人は武士とやら、婦人・小童、上方にもおとらぬ人物多かりき、人物多かりき、亀田より新沢へ三里、此方ハ又々山坂にて、在々人物・言語、本庄・亀田より大におとれり、此日初てばち馬といふを見る、平生の馬とは大違ひにして、耳長く歩む事にふく、尾は犬の尾のこたく、画にかけら驢馬に似たり、此馬の事は江戸にて、秋田久保田の産、那波昌範といひし医師に先達つて聞し事也、甚た珍らしき馬也、予案内の者より委しく尋聞に、はち馬は価も下直にて、一疋三貫文位のもの有て、貧家の百姓こへふみに飼ふよし、喰付はねるといふもしらす、力もよはくして重き物ハ付る事ならず、少の荷物或は柴木或ハ稲草などをおわせるのミと云、

雅成事故、人々望に思ひし事なから、いかん共なし難し、海内狭しといへとも、かゝる馬ある事を江戸にてしる人なし、予ハ先達て那波昌範の咄にて聞し事あり、奥羽は他国と替りて広大なるを思ふへし、此外にも鳥獸海魚に異なる物ありと物語ものもあれとも、予か見されハ虚説を恐れて爰に書加へず、

四日新沢出立、二里廿四丁にして小栗村、三里廿四丁にして老方止宿、この道々には化石多し、新沢の宿に雪のことき白き図のこときものありて、何の木といふ事をしらす、

御物川（以下同）は雄勝郡・由利郡より流出て何方にても御物川と称す、

五日老方村出立、三里十三町にして大沼村、此所より雄勝郡にて佐竹領分に入、西馬音内村（以下同）へ二里三十四丁、西馬音内村止宿、老方村より少し出てアンサ峠と称す大坂あり、此坂の間三里、頂を街道とす、左右を見るに山連々として、見る目も恐しき深山也、生駒侯の御知行所高八千石にて、方十里ありといふ、坂中の雄勝郡・由利郡の界あり、此山には桔梗・かるかや・女郎花数百本乱れ咲く、其美しき事筆に尽しかたし、立上りては詠め、爰に休みては興に入し事なり、山の谷そこには樵夫の住家と覺しく、爰かしこに一ツ家あり、世にいふ住は都にて、さして淋しと思ふまし、古歌に、

住む人もなき山里の秋のミは月の光りもさひしかりけり

此歌の情をおもひなすへし、

大沢よりはまた田野ひらけ人里も多し、然れとも人足のものとも士に会せる所なき所にて礼をしらす、不礼の体、夷狄の風かくやあらんと思へしなり、案内に出る者は庄屋・名主なるに、此辺よりハ無筆のもの

ありて、郡村の文字もしらず、言語も解しかたし、こまりし事まゝあり、定て御巡見使御通行とて、村々よりも撰りて出せし案内者なるへし、

上方・中国筋にては決してなき事なり、米直段老升廿四文、一石にて二貫四百文位、近年の高き直段なりとの事なり、

小栗村に大ひなる板の化石あり、長サ六尺余、幅二尺余、珍らしき石也、隣のきしなどには、杭の其俣に石と成しも、橋板の石と化せしも有、しるすにいとまあらず、皆々略しぬ、江州石亭などに見せなは、爰に家を移さんといふへし、化石沢山成事いふ計なし、此辺にては人物・言語も次第くにあしくなりて、御巡見使を拝見せんとて在々より出る者の中にハ数珠を持てひれふし手を合せて御巡見使を拝むも有、様々なりし奥に有し事也、

小栗村より老方村の間に、桜峠と称する峠二里の坂ありて、頂に亀田領と矢島領の界なり、矢島領ハ生駒斧太郎殿交代の御旗本八千石の御領分なり、此坂を越るより器物に異成もあり、言語解難、人物賤し、大國とはいひながら風俗のかはりやう大違にて人々評判すくなくらず、世の中は何国もさして勝劣なき事に思ひしか、此辺にては御領分よりさし出さるゝ人足とも御巡見使の前に立つ、下におれと大声によは□といへとも、裸身にて居もあり、手計を突て尻を立しもあり、家の内にてハ足投出して寝て居るもありて、尊きを敬するといふ事ハ生れなからにしてしらぬ体なり、古しへ橘の諸先公陸奥守となりて下り給ひしに、夷狄の風俗無礼なる体を見給ひて大に怒り給ひしを、傍に有し采女なる女安積山の哥を詠せしハ、かゝる事にやと〔插图⑧〕古しへを思ふ情あり、扱吉祥院の庭前に面白き化石の手水鉢あり、何の木といふ事をしらず、形図

のことし、

六日西馬音内村出立、西馬音内村より廿丁東に、杉の宮村といふ所に三輪の明神あり、御巡見所にして、別当を吉祥院と号して佐竹侯より五千石の奇付あり、古跡所にて数々宝物あり、仏体に雅なる木仏多し、弁慶が笈・同長刀あり、是ハ殊勝に見へしなり、大般若六百巻、弁慶の筆跡といふ偽り物と見へたり、又八幡太郎の太刀并首かきあり、具足二領、直江山城守・小野遠江守奉納、此ほか馬具も見へし、何国にても真物は稀なり、湯沢へ出る間にも御物川舟渡しなり、舟図のことし、

湯沢の駅に出る、此町三百余軒、久保田侯の家士佐竹左衛門老万石の在所にて、此所より南二里に小野村といふあり、傍らに墳墓もありて小野愛翫せしとて芍薬九拾九本今大ひに繁茂せりと案内のものゝ物かたりなり、此所者御巡見所にあられはゆかず、此夜横手の駅口止宿あり、湯沢と横手の間川あり、岩崎川とも、となせ川ともいふ、是よりして平鹿郡に入るなり、

#### 〔插图⑨〕

七日横手出立、二里にして金沢、一里半にして六郷、二里三十余町にして花立沢止宿、横手者久保田侯の家老戸村十太夫の在所二万五千石、市中三百余〔插图⑩〕軒、此所は天文の頃小野田遠江守と云し人の古城跡にして、戸村氏の館要害の地と見ゆるなり、戸村氏ハ難波戦記にもしるし、世に武功ありし家なり、此ゆへにてや家来あまたにて此所に居住する士家にて夥しき人数なりと土人の物語なり、金沢の駅者古しへ仙地金沢と称して名ある所なるに、今は殊の外あしき町なり、厨川の古城跡あり、今は八幡宮の社あり、御巡見所なり、麓より登る事五丁余に

して左右の山の頂き平にして古城跡残り、南の山の尾に権五郎景政の墳なりとて大なる杉の木あり、予按するに景政爰にて死せず墳の有へき□うなし、景政矢にあたりし所なるへし、

予按るに厨川の城南部盛岡なり、後人誤るもの歟、数百年の後ハ地名も定かならず、日本流にて古しへより書記す事の疎略なるゆへなるへし、後に委しく尋聞しに、昔時者高名塚と称せしといふ、しかれは景政、鳥の海弥三郎を射殺せし所のしるしなるや、何分にも義家公家衡征伐の時の戦場とハ見へて、かしこ爰に砦とせし山多し、町の中へ厨川といふ小川流る、云伝ふ景政〔挿図⑪〕弥三郎に眼を射られて、此川の辺にて矢をぬき眼をあらひしによりて、此川のかちかといふ魚ことくく片目なりといふ、案内の者に河鹿の魚違ひもなくことく片目なりやと尋ねしに、ことくく片目にもあらず、稀に片目のカザカある事といひしなり、予と谷村喜兵衛と共に小川に入て、岩間くをさがしてかじかをとらんといろくせしに一疋もおらず、川も溝同前の小川にして、常には河鹿の魚なきと見へたり、何国にても怪しきをいふ所も多けれども、直に行て其実を正す時者虚説なるものなり、何とて日本にてハ、虚説を信して書杯にあらはす事にや、此一事も書林旧記にて先達て見し怪説なり、古しへは南にて仙北と称し、中頃仙北郡といふ、今は山なり郡也、家衡・武衡征伐の時、爰かしこにて合戦ありし所古戦場の事跡を、案内のものはいふに不及土人数人に尋ねしに、是と称する所ハなし、辺鄙なるゆゑに、その地を失ひしものなるへし、

予按るに奥州安東太郎頼時の子四男一女あり、嫡子は盲人にて閑居し、二男を安東太郎良宗と称し、三男厨川三郎貞任、四男鳥海三郎宗任と称

して、前九年の戦ひ世に知る所なり、爰を以て考へ思ふに、嫡子の盲人と安東太郎良宗は奥州にありて、貞任・宗任は当国を知行せしによりて、厨川・鳥海の称名をつきしものなるか、不審すなからず、武則の子家衡・武衡朝敵となりし時ハ、当国にありしに違ひなし、鳥海弥三郎といひしハ、鳥海宗任にハあらず別人なり、

此地より鳥海山を見れハ未申にあたりにて、山の風景ひとしほによし、駿河の富士山を見し目にてハ大ひに低しといへとも雅なる事富士山につく山なり、奥羽の界にある駒ヶ嶽面前にあり鳥の海山にハ大ひに劣れり、さて此辺に來りては郷中の民家のもよふ至てあしく、街道筋の家々甚賤しく衰れなる体なり、田所は上方・中国筋にはかはらず、稲作の見事なるに、何とて貧究(マツ)の住居なるやと、人足に出しものに尋ね聞は、御領主より懸りもの多く、駒などもあまた生し、昔時者百姓の大ひなるたすけにて候ひしに、今にては運上となりて、駒の直段金二両なれば一両ハ御領主へ上納す■ぐなる国とは思はさりし事なり、地の理も人和に及ざるに古賢の金言けにもと感せられけり、

八日花立駅出立、三里半にして苧和野、二里半にして堺、板にある日本行程記・細見記たかひ多し、信すへからず、花立より少し北に神宮川あり、浜川共いふ、舟渡しふねわたしの川なり、神谷村といふに八幡宮の社あり、御巡見所なり、社伝に云、大同二年田村丸たむらまるの建立、棟札三枚あり、至て古く見へて二枚は文字見へず、やうく大の字と覺しき文字あり、一枚者頼朝公再興の棟札にて文字の少し見ゆる所あり、宝物に白旗一流れ、是も正真物と見へたり、至て古く、又長さ六寸余の中に乳のある馬腦石ばのうしあり、何れも珍らしき宝物なり、無法に国々を廻れば、正真なるものも

見て目をよろこはしむるものなり、別当を松香山神宮寺と号し、社領僅に五石なるゆへに御社ハにしき也、荻和野と神宮寺の間、坂にして頂より左右をみるにかきりなき山中なり、御巡見使を見物に出るもの此辺にては何といふへくもなし、古しへも今もかはりし事はあるましと思ふ夷人なり、婦人者おとろの髪にて、みしかき袖、みしかき〔挿図⑫〕二布にて臂・膝を出し、筆に尽しかたき体なり、庄屋・肝煎・名主など、名乗りて御案内に出るもの、十人に二、三人は無筆なり、夫にては村方の勘定諸帳面はいかゝする事と尋ね聞に、村方の算用にも上方筋とは違ひ、さしてむつかしき事はなく、算筆する人をやとひて事済む也といふ、名所・旧跡・山川・行程の事を尋れハ委しからず、言語もワからぬ様に答ふるゆえに、ミなく笑ひつゝ興ともなしぬ、山中の一ツ家を見るに造りやう雅なるといへとも辺鄙いはん方なし、かなしき住居なり、初めにいひしこゝよし、高下によらず直段の半金は運上になるとの物語にて、御巡見使へ訴へもしたき口ふりながら、領主より役人に役人を付て百姓の口を閉あれば、うらめし顔にて重き荷を負ひ、遠きを荷ふて御巡見使を送るありさま、心ある人々ハ哀れに思ひしほとなり、予按るに肥後の国阿蘇郡の民家に似たる困究(マツ)の地なり、

予これまで通行せし地理を見しに、要害堅固の地、嶮岨はかりなき切所かしこ爰にあり、家衡・武衡謀反せし時、義家公何の手もなく三ヶ年に及ずして兄弟のものを亡し、大国を治め給ひし事は、義家公良将なりしか、家衡・武衡の能々の愚将なり、良将として奥羽の二州を守らは、関八州はいふにたらず、日本国中の大軍をもつておし来るとも、一人も国の中へは入ましと思ふほどの地の理なり、しかるに家衡兄弟、武勇を

たのみて切所によらず、その戦ひし旧地を見るに地理によらざる事明らかなり、爰をもつて思ふて義家公の武功も家衡兄弟暗将たるゆへなるへし、兼て大国とは聞し事なれとも、かほとまでの地の理よき広口住か都にて無為にして心をやしなふにはあしかるまし、

九日境の駅出立、四里戸島、三里にして久保田城下止宿、境より戸島までの間に舟わたりし三ヶ所、何も戸島川の流れなり、はしめの渡しを石川の渡と云、中の渡しを海中のわたしと云、後者戸島をこえて渡るくひなれの渡しといふ、戸島川と御物川とは筋ちかひにて、落合て一流となる、両川ともに鮭・鮎・鱒の名産あり、御物川に者川舟の往来ありて、不相応の大帆をあげて上下をす、帆の川舟に大ひなりしはり方よしといふ、

戸島より久保田の城下までは、なかもなき道なり、奥羽のさかひに大山ならひ立、中にも駒ヶ嶽・大ひら山、大山に見ゆる也、

津軽の弘前者久保田より者丑にあたるといふ、予が所持する当国の図、この辺にては大違ひなり、追々改むへし、久保田は昔時秋田城之介代々城主たりしに、今は佐竹侯の御城地にて、当主次郎候と称し二拾万五千八百石余の諸侯にて新羅義光の嫡流にして諸侯の中にて歴家なり、佐竹左中将義宣の頃まで常州の太守なりしに、故あ□て此地へ移られ給ひ、羽州六郡の太守なり、知行所広大なるにかゝしてや、貧究也と風聞ある事なり、此度委しく聞に御知行高不相応に御家士数多にて、大夫に高知の家多き故といふ、左もあるへき事にや、市中三十六町にて三千八百余軒の地なり、町のもやうミなく杉板の屋根にて、上に石をかすく並へておしとなし、壁も板壁にしてひさしハ同しやうに一間余もさし出

して、是を雪道と称して雪の降せつの通ひ路とす、往来筋には富饒にみゆる家居もなく、爰かしこに草ふきの小家ましはりて、上方筋の城下とちかひて見くるし、御巡見使御馳走に家々に梯を出し、水桶を軒に縄を以て釣りてあり、見なれぬ事ゆえにおかしく思ひし事なり、三枝候御宿は本町三丁目中村太兵衛と云し此所の豪家なり、膳を出せしに飯椀・汁椀大小もなき同し椀なり、かゝる椀はみなく初て見し事也、城は山城にして要害堅固の城と云、往来より見上る所広大に見へしなり、此所さしての人物もなく名産もなき地なり、かの名高き露の事を尋しに、此地にはなし、山中に入れば自然と生ぜし露に大ひなるもありといえり、那波昌範の親類を尋聞しにみなく無事なり、予此日取次役を頼まれ、御馳走役に出る人々と会し、殊の外いそがしく訪ひもせさりしなり、

足輕町と覺しき所によき松あり、都かたにありなは世に評判せん松なり、あるしの愛樹と見へて数本杖をつかせ、垣結まはしありしなり、北へ出る町端に穢多町二丁程あり、皆々御巡検見使拝見に出しを見れば、亭主と見へしは袴を着て居るなり、是まで見し人足なとよりも穢多の方よく見えしなり、所の風とはいひながら他国になき体なり、此日は店なとも奇麗にかさり、皮細工の数品並へありし也、予か此度の道中ハ九州一見の六部修行の体とは事かはりて、国民に敬せらるゝのミにて和しかたし、国人の気象よしともあしと更にしれす、庄内の辺の立柴にて人の心至てあしき事に聞へし故に、予心を付て見るに、秋田の分に入りては貴賤にかきらす一風流ありて、鼻にかゝりて解しかたき事まゝあり、此方の言葉も聞とらぬ事ゆえ、面倒に思ひて尋る事も略せし也、荷物をかき荷ふ人足、一荷に五人も七人もかゝる事なるに、中にて強き人足は

弱(きよ)口人足はかりに持せて、強きものは大將顔して呵りまはりて荷物を持たされとも、弱き人足のもの是非なく重きをつく体なり、木村金次・小泉茂七是を見かけて馬より飛下りて、強き悪き者と覺しきを二人ながら擲倒せし事もありて興せしなり、是等の事も御領主・役人より制度なき故か度々記せしごとくに、一国にても風俗のかはりやう大ひにして、人々あきれし事なり、山形・鶴岡・本庄辺・亀田など、此所にくらへ見れば雲泥の違ひなり、

左に図するかごとく八郎沼と海と一所になりしものと見へて汐入の所僅也、此沼に海魚入らす鮒多し、大ひなるは二尺余価至て下直にて大ひなるハ七八拾文、白魚も多し一斤五錢八錢、海老も多しあたへ白魚に同じ、此沼南北三十六町道七里東西一里又ハ三里所にありて遠近あり、

男鹿島二万石余の田所にて此島西に出張ること数里、高山あり赤山といふ、権現の社あり、

十日久保田の城下出立、五里余にして大久保、二里半にして一日市止宿、久保田より北一里に湊町といふ有、此所者秋田六郡の産物此浦に出し交易の所にて、中国・九州及び大坂の廻船此湊に入るなり、此故に町もあしからず、千三百余軒、倡家もありて賑々しき町なり、久保田の本町よりも湊町の方すくれたり、此海辺にハ沖より大風時々吹上ると見へて砂山かしこ爰にあり、草木さらになく、しろくとして月夜などには興あるへし、

久保田より大久保まで五里の間者、百姓の家々南の在町よりはよし、五里の道々ひやうくとせし野原の砂地にて、西の方男鹿島を見、南はるか〔挿図13〕に鳥海山を見る、作物生立よし、くるく百姓の貧しき

には不審なり、此辺瓜・西瓜を作る所にて、食し見るに味ひよし、

予ハいつれの所にてても百姓の家に入て風俗を見、諸品のかはりし事もあらんやと、それを樂しミとせし事にて、此辺の家を見るに、建やうもかはりて、一家も残りなく土間住居なり、和哥などに賤かふせやなどゝよみし住居もかくやあらんと思ふなり、家つくり人の伏したるやうに、軒の高き塩屋を見るかこときの家多し、此ゆへに伏屋と□ふなり、

十一日一日市村出立、五里豊岡、野代浦止宿、一日市より豊岡まで平地にして、八郎か沼のほとり通行、馬上より男鹿の島を見るに風景至てよし、西南の方は広太の原にて、薄間もなく桔梗・かるかやの咲乱れたり、僅に見ると違ひて、一里余もある原に一面に咲しは至て見事なり、人々馬をとめてしはらかなめし事なり、

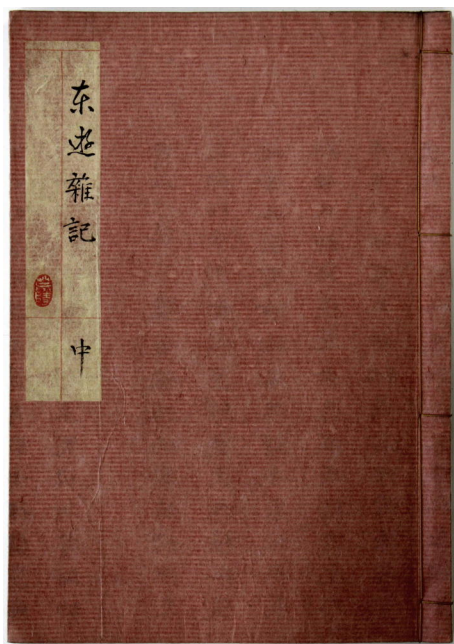
此辺にては言語不詳、馬卒に所の名或ひ八国の名または行程を問ふに通ずる事は稀なり、無言にて笑ふのミ、まゝ興もありしなり、男鹿島は世にしる所にて、八郎沼の風景いはんかたなし、此沼の怪説多し、予か信せざる事のミゆえに記さず、大概図のことし、此辺は魚類をはしめとし、瓜・西瓜・なすひの価はなはた賤し、瓜の大ひなるは三錢なり、何とて如此下直なるや、是にてハ瓜をつくりて業になるましき事と、人足のものにたつねに、この地者米の下直なる所ゆへ、作り候ても業になるといへり、此節米近年の高直とて一升到付式拾七錢なり、是をもつて考へ見れば諸物の下直なるも尤の事なり、銀をしらす、もとより式朱銀などとはしらす、御巡見使御用ゆえに、此方より出せる式朱銀ハ是非なく取るとミえたり、

豊岡の南一面の原にてかきりなく、所々に乞食小屋同前の百姓屋ミゆ、

くわしく聞に、人死して墓といふもなく、野に葬りて土をかきよせて置のミといへり、大家にても竈といふものなし、いきみと称して炉をさして、それにジザイをつりて煎焚をする事なり、此辺の風俗者義利礼義者もとよりしらす、身をかさるといふ事もしらす、誠に夷人なり、予六十才までかゝる辺鄙、かゝる哀れなる暮しもあるやとあきるゝはかりなり、予帰郷の後に旧友にかたりて、おご□ある人を制したきことなり、

### 【挿図】

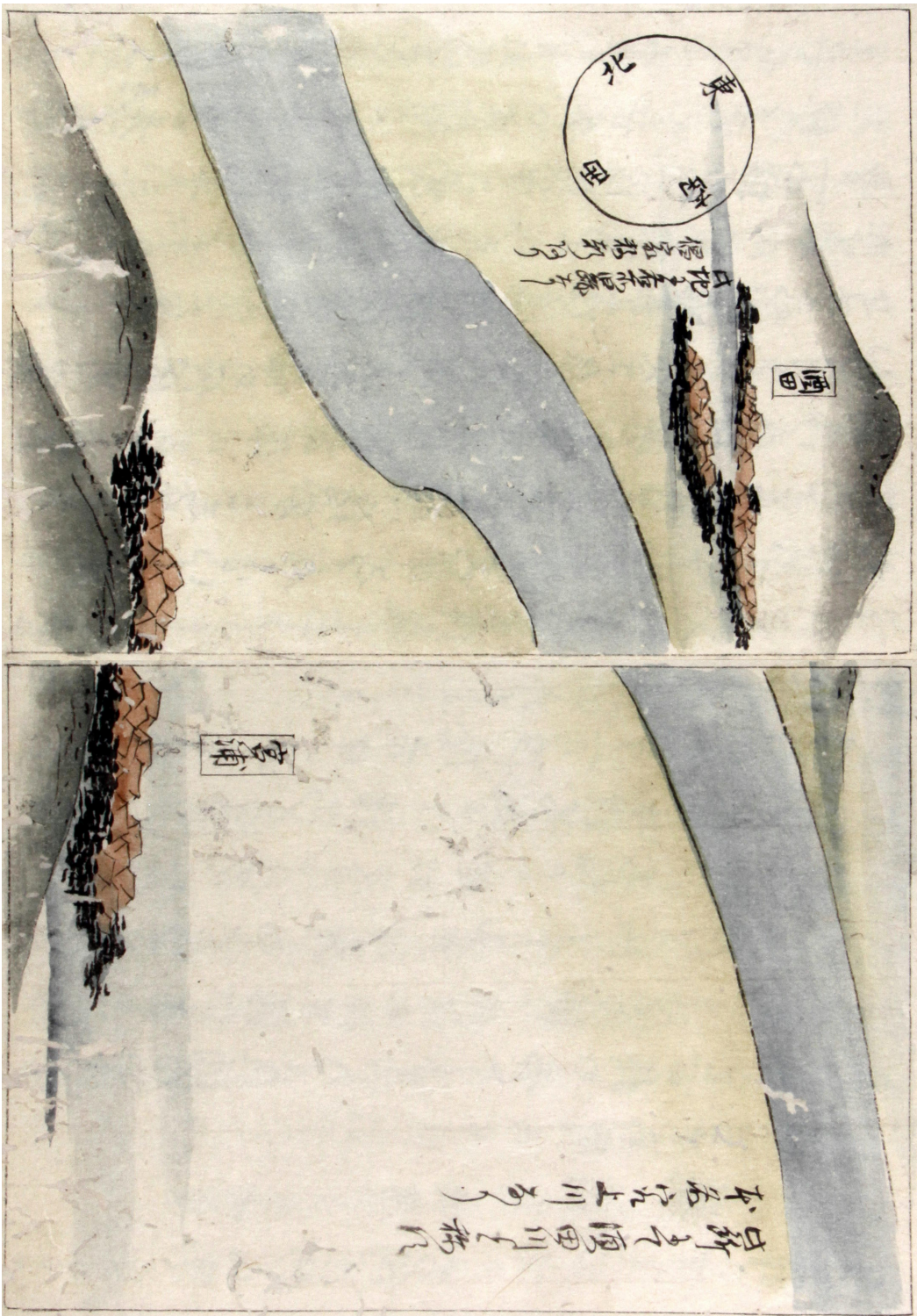
〔「東遊雜記 中」表紙〕



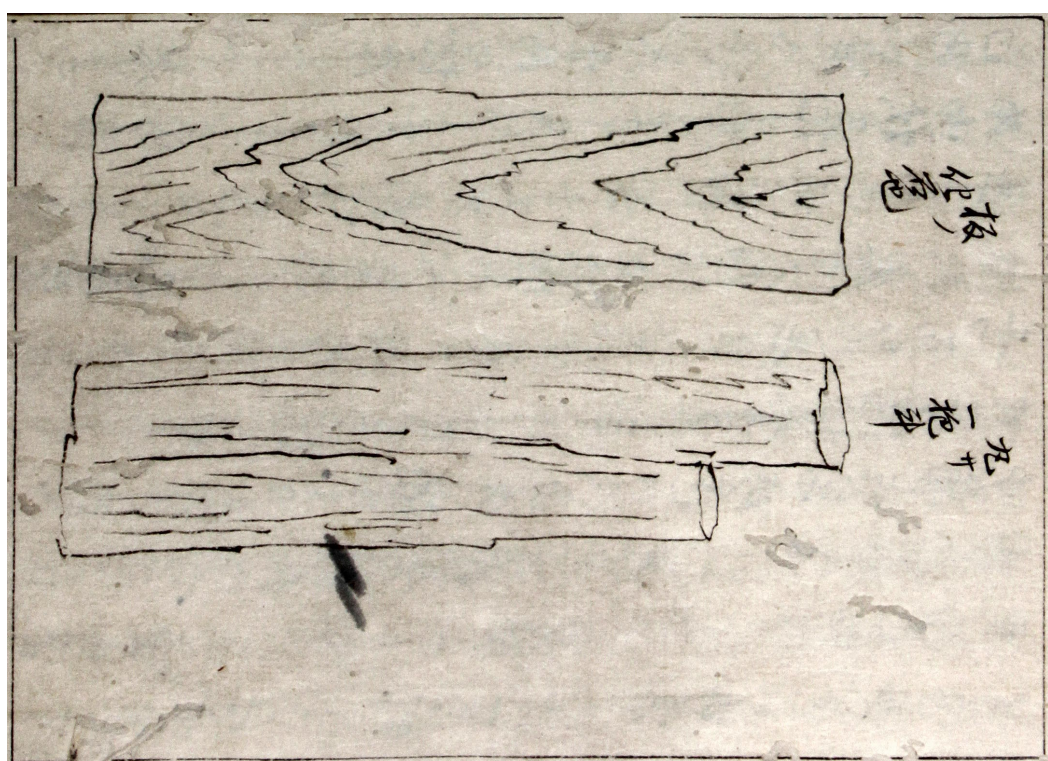


〔挿図①〕

右上段「此所にて須田川と称す、本名最上川なり、」 右下段「宮浦」  
 左上段右「酒田」 左上段左「此地に各所旧跡なし、倡家数軒あり、」







〔挿図②〕  
右「丸」一抱計」「左「板」化石也」

〔挿図③〕  
 右上段右より 羽州鮎海郡鳥海山 鶴巻湖 青塚 古屋  
 右下段 古塚 左 青塚

